

寄稿 4

地方都市K市とは どこか



和歌山市立有吉佐和子記念館館長／
天満天神繁昌亭アドバイザー

恩田 雅和

夏目漱石が明治44（1911）年に発表した唯一の小説「手紙」についての謎が、私にはこのところ頭から離れられません。

『吾輩は猫である』から未完の長編『明暗』まで名作を次々と書き継いだ漱石には、約11年の創作活動のうちエアポケットのようにわずか短編小説1編しか残さなかった年がありました。それが明治44年で、理由ははっきりしています。

前年6月、長編『門』を書き上げた漱石は、胃潰瘍にかかり入院します。病勢がままならないため8月に修善寺温泉に転地療養しましたが、そこで大吐血してしまい、一時は危篤状態に陥りました。ようやく落ち着きを取り戻した10月、東京の長与胃腸病院に再入院し、そのまま年を越して44年2月までの闘病生活を余儀なくされました。

体調が整ったその年の6月、信濃教育会の依頼により長野市で講演、あわせて長野県の諏訪中学校と新潟県の高田中学校でも講演に回りました。

8月に入ると、小説記者として籍を置いていた大阪朝日新聞社からの要請により、明石、和歌山、堺、大阪の各地を訪れる関西巡回講演に出向きましたが、最終地の大阪で胃潰瘍が再発、当地の湯川胃腸病院に約1か月入院しました。

このように漱石にとっての明治44年は、前年夏の修善寺の大患を癒すことに費やし、やや回復したとみられた6月と8月にそれぞれ講演旅行に出かけました。挙句、旅先の大阪で再度倒れたため秋から冬にかけて、またしても病院と自宅において療養せざるをえなくなった一年でした。

その療養の間隙を縫うようにして書かれた短編小説がその年唯一の「手紙」で、長野と新潟の講演から帰って間もない明治44年7月25日から31日までの7日間、東京朝日新聞に連載されました。

小説の内容は、自分の家に下宿していた佐野重吉が大学を終えると、就職のためHという田

舎へ出てしまいました。重吉とは妻の遠縁の静と縁談の約束があったので、「それにしてもHはあんまりぢやないか、責めて大阪とか名古屋とかなら地方でも仕方ないけれども」と自分は重吉のH行に反対していました。縁談話がそのままだったので、自分はK市へ行く用があり、「丁度好い序だから」「帰りにHへ寄って」話をはっきりさせることにしました。Hへ行き、宿屋を探しますと、あいにく招魂祭とかで部屋がふさがっています。仕方なく重吉がかつていた部屋で帰りを待っていると、「お祭りで飲まされた」と酒気を帯びた顔を見せました。自分は重吉の影に玄人の女がいることを察しますが、静との話を質すと、こんな田舎に来てくれるんですかと答えます。静に未練があるようなないような、重吉の中途半端な態度のままに小説は終わります。

これといった起伏のない短編小説のせいか、これまでの漱石研究者にもほとんど顧みられなかった作品です。ストーリーは何の変哲もなさそうですが、ただ佐野重吉の就職した土地がHとイニシャルにして具体名が伏せられ、近くにあると思われる町もK市とされるだけで、いずれも都市名が隠されているのが不思議です。

「手紙」が発表されたのは先にも述べた通り、明治44年7月25日から31日までの東京朝日新聞紙上でしたが、詳しく見てみますと、大阪朝日新聞に同じ「手紙」が掲載されたのは8月15日から21日までの7日間と半月遅れの差がありました。それまでの漱石の作品は、『門』にしてもその前年、明治42年に連載された『それから』にしても、東京・大阪両朝日新聞の掲載はほとんど同日でした。

「手紙」の掲載日に半月もの時差が出たのは、何らかの作為があったものと思われませんが、ひとつ考えられる理由は漱石の関西巡回講演が8月13日から18日にかけて4か所で行われていたことです。巡回講演会を主催した大阪朝日新聞が、漱石の講演日に合すように意図的に「手紙」の掲載日を遅らせ、講演会を読者に強くア

ピールしたかったものと思われます。実際、大阪朝日の8月17日紙面は、「手紙」の3回目と「堺の朝日講演」の告知記事が並び、18日では「手紙」の4回目と大阪の「朝日記者講演会」の小見出しが同じ段に載せられていました。

実は、この年の大阪朝日の巡回講演会は、これのみでなく3班に分かれていました。1班は7月23日から27日の間に、朝日記者の西村天囚ら4人の講師が龍野、姫路など兵庫県内の5か所を回りました。2班は8月3日から10日にかけて東洋史学者の内藤湖南ら講師4人が、岡山、津山、広島、呉など岡山と広島の両県にまたがる7か所を巡りました。そして3班が先述した一府二県の4都市を漱石がメインで3人から5人の講師により巡回したもので、いずれの会場とも聴衆で一杯となり、特に最後の大阪市公会堂では満員札止めになるなど、主催者の目論見はまさに大当たりしました。

「手紙」自体が東京朝日に掲載開始された日と、大阪朝日主催の巡回講演のスタート日が2日しか違わなかったことから、「手紙」の執筆依頼と関西巡回講演の依頼がほぼ同時期に漱石に舞い込んだことが推測されます。そうであるなら、小説中のHとK市はその時の漱石にとって巡回講演先のイメージとダブって付けられたことも考えられます。

「手紙」は漱石研究者にほとんど顧みられていないと述べましたが、集英社版『漱石文学全集』第10巻の解説で、荒正人がわずかにK市に言及している部分がありました。「愈K市へ立つといふ前の晩に成て、」という「K市」が何処を指しているのだろうか。イギリスから帰朝して、この小説を書いたと推定される明治四十四年六月頃までの間に、漱石は京都に行っている。「K市」のKが思いつきでないとする、「K市」は、京都を指すものかとも思う。」

K市の京都説を挙げている荒は、K市に近い土地とみられるHについては何も言ってませんが、京都では矛盾するような一節が「手紙」本文中に書かれています。

「それにしてもHはあんまりぢやないか、責めて大阪とか名古屋とかなら地方でも仕方がないけれどもと、自分は当人が既に極めたといふにも拘らず一応彼のH行に反対して見た。」

ここに大阪と名古屋の具体名が挙げられているので、K市はそれよりさらに西の地方ということは明らかと思われまゝ。大阪より西で関西巡回講演先と重なる土地というと、漱石は加わらなかった2班の岡山、広島両県でしょうか。講演地の一つ呉ならK市にあてはまりますし、近辺の広島がHとするならイニシャルにも符合します。

しかしなぜ漱石は、大阪と名古屋ははっきりと地名を出しているのに、呉と広島に限っては地名を隠したのでしょうか。また明治44年の時点では呉と広島はともに市制施行されているので、呉をK市としたのは分かるとしても広島にはHのみで市を付けなかった理由ははっきりしません。呉、広島とは別の「あんまりぢやないか」と言わしめるほどまだ遠方の土地が、漱石の頭にはあったのかもしれませんが。

この「手紙」を書く直前の6月17日、漱石は東京を発って信州に向かい、18日長野県会議事院で「教育と文藝」と題して講演しました。その後急ぎよ漱石は、新潟県の高田に向かう列車に乗り込みました。それは前夜、長野の宿に森成麟造が挨拶に現われ、森成の母校高田中学校での講演を依頼したからでした。森成は漱石が前年8月修善寺で大吐血した際に治療にあたった主治医で、そのあと郷里に帰り、医院を開業していました。

予定になかった講演を漱石が引き受けたのは森成に多大な恩義を感じていたからにほかなりませんが、ただ急に決まったことで、高田へ行っても宿がとれず、やむなく漱石と同行の夫人鏡子は森成の家で二泊しました。そのことの詫び状を漱石は帰京してすぐの6月22日付で森成に送ります。

「拝啓今回は不図高田へ御邪魔に出る気になり思ひも寄らぬ御迷惑を不時に相掛まことに申

訳無之ことに招魂祭で旅宿が塞がつてみた為御宅にづうづうしく寐泊りをして新婚早々の令夫(人)を驚ろかし奉り実以て相済まぬ儀と心中大に慚愧を感じ居候」

この漱石の手紙から、漱石の高田での宿泊先がほかならぬ森成宅であって、それも「招魂祭で旅宿が塞がつてみた為」であったことが知られます。漱石が森成宛書簡を書いた約1か月後に東京朝日に連載した小説「手紙」にも、語り手の自分がHで宿を探したものの招魂祭でふさがっていたため途方に暮れる場面がありました。どうやら漱石にはHの地方をイメージした時に、森成に呼ばれた高田の町が意識の隅にのぼったように思われます。

それならTとし、ついでがあつて行った長野をN市としてもよかつたのでしょうか、そうはせず、名古屋、大阪よりもさらに遠隔地に想定したかたの思いがあつたのでしょうか。ちなみに高田は隣接の直江津と合併して昭和46年に上越市となりましたが、高田が市制施行されたのは明治44年9月のことで、漱石がこの地を訪れた頃はまだ高田町でした。ただ当時の高田は町でありながら、近隣町村や長野県の一部住民まで参集するほど盛大な招魂祭が催される土地柄でもありました。

なぜ高田がそのような土地柄であつたかといえますと、それは明治38年に設置が決まった陸軍第十三師団が41年11月に高田に入城していたからでした。日露戦争後、一等国意識が高まった日本は軍備拡張路線に乗り出し、富国強兵策の一環として各地に師団を増設しました。

城下町から軍都に塗り替えられた高田は当然のことながら軍人が町中を闊歩し、高田中学校も軍事教練などで軍事的色彩の濃い教育が施される校風に染められていきました。漱石の高田中学校での講演はそんなバックグラウンドがあつてのことで、それを察知していた漱石は講堂に集まった生徒たちに対し、言葉を選びながら慎重にリベラルな話を進めたことが想像され

ます。

さて小説「手紙」ですが、周辺からの住民や関係者が泊りがけで集まるほど盛大に招魂祭が催されたHとその近くのK市とは、一体どこにあるのでしょうか。高田の例を上げるまでもなく軍都であることは疑い得ません。高田が十三師団とすると、それ以前に設置された十二師団はどこにあったのでしょうか。十三師団よりさかのぼる7年前の明治31年、十二師団が福岡県小倉市で創設されていました。

陸軍第十二師団といえば、あの森鷗外が軍医部長として明治32年6月から35年3月まで赴任し、在任中に再婚したのがこの小倉の地でした。その小倉は明治33年4月に市制施行されています。一方、漱石は第五高等学校教授として明治29年4月から33年7月まで熊本に在住し、鏡子と見合い結婚して新婚生活をその地で送りました。ですから漱石にとっても九州は縁のあるなじみ深い土地でもありました。

「手紙」のK市とは小倉市ではないでしょうか。そうしますとHとはそこに近い福岡でしょうか。いいえ福岡ならFにして、F市にしなければいけません。では博多ならどうでしょう。博多は九州北部のかつての筑前国をさす旧国名であって、今でも市を付けることはありません。Hという田舎へ引っ込んだ重吉に会うため、自分はK市である小倉市へ行くついでに帰りにHの博多へ立ち寄ったとすると、腑に落ちます。

関西の巡回講演地にとらわれすぎて小説の舞台を広島、呉と思い込まされていましたが、招魂祭というキーワードを見つけたら謎が解けたように思います。長野、新潟を訪れた直後だけに、漱石は高田、長野と実地名を小説中に記してもよさそうでしたが、現地に住む森成麟造への差し障りを懸念してT、Nとイニシャル化するか、いっそ「あんまりぢやないか」と思われるほど名古屋、大阪よりも遠方の九州あたりにして読者の目をくらますHとK市にしたのではないのでしょうか。漱石の高田中学校の講演内容について後に県警察が問題視したと地元で報じ

られたことがありましたが、ここでは詳しく触れられません。いずれにしる漱石は森成に累が及ぶことを極力避け、命の恩人に対し後々まで慮ろうとしたことが、この「手紙」から読み取れるものと思われます。